

## 原子力規制委員会記者会見録

- 日時：平成29年9月22日（金）
- 場所：原子力規制委員会庁舎 記者会見室
- 対応：山中委員 他

### <質疑応答>

○司会 続きまして、原子力規制委員会新委員の山中伸介の会見を始めさせていただきます。

初めに、山中から御挨拶申し上げます。

○山中委員 本日、更田前委員の後任といたしまして原子力規制委員会委員を拝命いたしました山中伸介でございます。

福島第一原子力発電所事故の大いなる反省を忘れずに、安全確保を第一に、国民のために委員として職責を果たしてまいりたいと考えております。今後ともよろしく願い申し上げます。

私がこれまで大学で行ってまいりました原子炉重大事故時における安全研究や人材育成、これらの経験を生かしまして、更田新委員長を支え、他の委員並びに規制庁の職員と協力いたしまして、原子力の安全に貢献できるよう業務を遂行してまいりたいと考えております。また、私の委員としての活動が少しでも福島の復興に寄与することを願うとともに、日本が国際的に信頼されるよう最善を尽くすつもりでございます。

○司会 それでは、皆様からの質問をお受けします。先ほどと同様、質疑応答は一往復でお願いしたいと考えていますので、御協力のほど、お願いいたします。また、質問の際は、所属とお名前をおっしゃってから御質問をお願いいたします。

それでは、御質問のある方は手を挙げてください。スミさん。

○記者 共同通信のスミと申します。よろしくお願いいたします。

いくつかお聞きしたいのですが、山中先生、これまでずっと原子力にかかわってこられたと思うのですが、ほかの委員の皆さん、更田新委員長も先ほどおっしゃられましたけれども、1F事故が起きたことに関して、事故を防げなかったとか、いろいろな思いを持って、今日、この場にいらっしゃると思うのですが、まずそのことをひとつ聞かせていただきたいことと、あと、先日、国会で承認された後に、ぶら下がり取材で、原発の運転期間、原則40年というのは短いのではないかという趣旨の発言をされたと思うのですが、これについて、現在の考えをお聞かせください。

○山中委員 2点御質問があったかと思えます。まず、福島第一原子力発電所の事故に対する私の委員としての思いについての御質問についてお答えをしたいと思います。やはり長年にわたって原子力の研究、教育に携わってきた者としては、福島第一原子力発電所の事故というのは極めて残念なことであり、断腸の思いでございます。したがって

て、今後の規制委員としての私自身の活動が福島の復興に何らかのお役に立てばという気持ちであります。

次に、2点目の運転期間40年の制限についての御質問でございますが、規制委員といたしましては、この運転期間の制限40年というのは法律で定められた基準でございますので、これについては厳正に守ってまいりたいと考えてございます。また、運転延長についても、厳正に審査をしてまいりたいと考えております。

以上でございます。

○司会 ほか、御質問のある方、ございますか。どうぞ。

○記者 朝日新聞のオオムタと申します。

よく原子カムラという表現をされることがあります。私ども、長年取材していますと、例えば、これまで原子力の推進の立場とか、あるいはそういったことに携わってこられた研究者、学者の先生方、多くの方々が、この事故の前に日本の安全規制のあり方だとか、炉の安全性とか、過酷事故対策とか、そういったことに対して、余り声を上げてこられなかったのではないかと感じております。先ほどおっしゃいましたように、長年原子力教育に携わってこられた立場から、そういったことに対してはどのように見ておられるのか、どういったことが今の学术界、原子力研究者の間に足りないと感じておられるのか、その点をお伺いします。

○山中委員 御質問1点かと思えます。原子力研究者、あるいは教育者として、これまで是正に関しての発言を怠ってきたのではないかと御質問かと思えます。確かにそのとおりでございまして、私も特に事故時の燃料、あるいは材料の挙動に関する研究、教育を続けてまいったのですけれども、安全性に関しての発言が確かに足りなかった部分があるかなという反省を持ってございます。その点の反省を踏まえて、今後の規制委員としての職務に当たってまいりたいと考えております。

○司会 御質問のある方。アベさん。

○記者 日本経済新聞のアベと申します。

2つお伺いさせていただきます。

山中委員は審査の御担当になったと思うのですけれども、その関連で、審査のスピードに関して、なかなか遅いのではないかと指摘もあります。この5年間で6原発12基が合格しましたけれども、理由としては事業者側の準備が遅いという意見もありますけれども、スピードに関しては一つ、今後の課題なのかなと思えます。このあたりについてどう思われるかというのが一つです。

もう一つが、今後、この審査を仕切っていくに当たって、特にどういったところを重視していかれるお考えか。更田さんの路線から何か変えるようなところがあれば教えていただければと思います。

○山中委員 2点御質問をいただいたかと思えます。

まず、私の担当といえますのは、原子力発電所の基準適合性の評価と、検査制度の見直し、この2つを更田委員から引き継ぐことになろうかと思えます。まず、審査のスピード感についての御質問、あるいは御指摘でございましたが、私自身、現状の原子力規制委員会の適合性に関する審査のスピードが遅いとは思ってございません。極めて適切な審査を行っておられますし、シビアアクシデントの対策に関する様々な取組について慎重に評価をされているということで、私は特段、現状の審査のスピードが遅いという判断はしてございません。

2点目でございますが、もう一度繰り返していただけますでしょうか。済みません。

○記者 今の御回答に近いのですけれども、特にどういったところを重視していかれるのか。例えば、東電の今の審査でしたら、適格性というところにちょっと踏み込んだ審査もしていると思いますが、このあたり、これからどういったところが審査の課題になっていく、変えるべきところとかがあれば教えてください。

○山中委員 1番目のお答えとほぼ同じになるかもしれませんが、やはり審査については安全第一で私自身も取り組んでまいりたいと思えますし、前任者の更田委員と考えが違ふ、あるいは判断の基準が違ふというのはおそくないだろうと。つまり、これまで原子力規制委員会で行われてきました審査というのは、いわゆる科学的な知見でありますとか、技術的な知見、専門的なものに基づいた知見で判断をされていると思えますので、私も更田委員も研究者、あるいは技術者でございますので、特段そこに大きな判断の違いが出てくるとは考えてございません。

○司会 タケウチさん。

○記者 読売新聞のタケウチといえます。

柏崎刈羽原子力発電所の審査が大詰めを迎えていて、近々審査書案を了承するかどうかという判断が求められると思うのですけれども、これまで議論に委員会の委員として参加していなかった山中先生が委員の一人としてこの判断に加わることにについて、どのようにお考えかお聞かせください。

○山中委員 御質問は、柏崎刈羽の原子力発電所の審査に私が加わることにについての考えといえますか、所信といえますか、御質問だと思えます。まず、審査の過程についての現状の確認については、原子力規制委員会の参事として6月から様々な情報交換をさせていただいております。また、柏崎刈羽の原子力発電所の現地も視察をさせていただいて、SA対策の施設の整備状況等、私自身の目で現場を確認させていただいております。また、現場に伺ったときに、事業者の様々な現場の責任者、あるいは現場の担当者とのコミュニケーションもとることができました。そのような現状でございますので、私、新たに委員として加わるわけでございますけれども、委員会でこの審査に関しての様々な議論をさせていただける準備は整っているかなと考えてございます。

○司会 では、フジオカさん。

○記者 NHKのフジオカと申します。よろしくお願いします。

今の質問に関連してなのですが、これまで柏崎刈羽の審査の中では、東京電力の適格性というところについても議論が及んだのですが、改めて現時点で山中さんとしての東京電力の適格性をめぐる現状と申しますか、こういったところをどう見ていらっしゃるか、お考えをお聞かせください。

○山中委員 事業者としての適格性について、これまで原子力規制委員会で様々な審査、あるいは評価をされてきたと思います。前委員長である田中委員長、あるいは規制委員会として、事業者としての適格性があるという御判断をされたかと思います。私自身、現場に赴かせていただいて、現場の様々な担当者、あるいは責任者と対話をさせていただいて、福島第一原子力発電所の事故を起こした当事者としてのいわゆる責任と反省についての様々な言葉、あるいは今後どう原子力発電所を運用していくのだという決意を聞かせていただきました。ということで、それらの現地の視察等に基づけば、田中前委員長の御判断、あるいは規制委員会の御判断は、私も同じ考えでございます。

○司会 ドイさん。

○記者 電気新聞のドイと申します。よろしくお願いします。

規制委員というのは大変責任が重くて、その判断に対しても批判を受けたりすることが多いポストかと思うのですが、改めて、なぜこのポストを引き受けられたかという理由をお聞かせいただきたいのと、ここ数ヶ月、参事という形で実際に規制委員会にかかわっていらっやったと思うのですが、そこで感じたもの、見えたものがありましたら、お聞かせいただきたいと思います。

○山中委員 2点御質問をいただいたかと思います。

まず2点目からお答えをさせていただきたいと思います。参事として原子力規制庁のお仕事をお手伝いさせていただくということが6月から始まりました。その間、この業務のいわゆる重さというのを感じるようになりました。

1点目に戻りますと、なぜそのような重責を引き受けたのかという御質問でございますけれども、学生のころを含めまして43年間原子力に携わってまいりましたので、今、非常に困難な状況の中で推薦をいただいた、これについてはむしろ光栄であり、それを受けることで国民の皆様方に貢献できるのではないかという気持ちから引き受けをさせていただいたわけでございます。

○司会 ミヤジマさん。

○記者 『FACTA』のミヤジマです。

山中先生が初めて1F、多分、行かれていると思うのですが、それは何年だったのか。

そのとき何を感じたのかをまず伺いたい。

それから、もう一つは、多分、田中知先生がまさに原子力立国計画などをやったプランナーで、しかし、その後の反省も踏まえて、こちらの委員になられたと私は聞いておるのですけれども、同じようなお立場だと思うのですね、副学長さん。これを引き受けようと思った、どなたに相談して、非常に重たい仕事だと思うのですけれども、その経緯を伺わせてください。

○山中委員 実は、福島第一原子力発電所を訪ねることはごく最近までできませんでした。というのは、一教授として現場に伺うということが現場の作業の妨げになるのではないかと、事故当時も大阪にいましたので、もちろん阪神大震災を経験しておりますし、震災のひどさというのはわかっておったのですけれども、原子力発電所の事故を防ぐ、あるいは進行を防ぐために何のお手伝いもできないという、非常に後悔といいますか、それでごく最近まで伺うことはできませんでした。8月の初めに仲間で見させていただきまして、やはり事故の悲惨さと今後の対応の難しさを感じた次第でございます。お答えになっていますでしょうか。

○司会 ほかに御質問のある方。カミデさん。

○記者 フリーランス記者のカミデと申します。よろしく願いいたします。

大変素朴な質問です。今の現実、1Fの事故が起きたということで、世論調査などでは国民の過半数の方が原発再稼働には批判的な声が多いかと思えます。そういう現状の中で委員として務められるという、なかなか難しいお立場かと思うのですね。反対されている方もいますので。そういうことも含めて、自分のこれからの仕事について、独自性、透明性という言葉が必ずついて回っておりますけれども、改めてその辺のお気持ちをお聞かせくださいませんか。

○山中委員 1Fの事故を経まして、原子力、あるいは放射線に対して不安に思われる方、非常に多くなっているというのは十分理解をしております。そういう思いをきちっと受けとめる必要があろうかと思えます。ただ、原子力規制委員会といいますのは、原子力の安全性について、科学的、あるいは技術的に評価して、より安全な対策、あるいは施設を整備していくというのが務めだろうと思えますので、そういう御批判はもちろん受けとめないといけませんし、重みについてはおもんぱからないといけません。私自身は技術的、科学的根拠に基づいた規制委員としての判断をこれからしてまいりたいと。非常に重責であるということはわきまえておるのですけれども、これまで原子力の研究者、教育者として長年にわたって務めてまいってきた知見を生かしてまいりたいと考えております。

○司会 御質問のある方、いらっしゃいますでしょうか。

○記者 先生、この重職を受けるに当たって、どなたかにアドバイスとか、私は田中知先

生あたりではないかと思ったのですけれども、これだけの決断というのは何かあったのではないかと、そこら辺を伺いたい。

○山中委員 正直申しまして、どなたにも相談はしておりません。非常につらい判断ではございましたけれども、自分自身で大学の副学長、理事をやめることも決めましたし、大阪大学をやめて規制委員になるというのも自身で決断をいたしました。総長にも決断後にお認めいただいたというのが実情でございます。

○司会 それでは、原子力規制委員会新委員長及び新委員の就任会見は以上にしたいと思います。どうもお疲れさまでした。